
しゅんあゆらいふ。

鞠虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゅんあゆらいふ。

【Nコード】

N9971X

【作者名】

鞠虎

【あらすじ】

とある女子高生二人の切なくも優しいピュア恋愛ライフ。主人公、歩花は男子の苦手な女の子。一緒のクラスになった背が高くてカッコいい女の子、瞬と付き合うことに。最初は軽い気持ちだったのに、一緒に過ごしていくうちにお互いが大切な存在になっていく…。

名前

王子様って、別に男の人じゃなくたって良いと思う。
だって私は瞬が好き。

誰がなんと言おうと私の王子様は瞬だけだから。

私、望月歩花、15歳。今日は待ちに待った高校デビューの日。

…待ちに待ったほど楽しみにしてたわけじゃないんだけど。
苦手な男子から距離をおけるのは嬉しい。

…そう、私が入学するのはとあるごく普通の女子高。
なんとなく入ってなんとなく過ごしてなんとなく卒業する。

そんなもんだと思っていた。

多分恋とかもしないんだろうなとか。女子高だから出会い少ない。
…まず男子苦手だし。

このときは私に恋人ができるなんて微塵も1ミリもこれっぽっちも
思ってたなかった。

昇降口に張ってあるクラス分けを眺める。

「…」

望月歩花、発見。

後ろで他の新入生が喜んだり悲しんだりしていた。

「ちょ、一緒だよったああ!」

「違うクラスだねえ…」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ女子高生の声を背にして、私は他のクラスメイトの名前をそれとなく確認する。

私は残念ながら一人だ。出身中でこの女子高に来たのは私一人。まあもともと女子の割合が少ない学校だったし…。

と、ある名前に目がとまる。

「佐渡…瞬」

しゅん…?男の子みたいな名前。

(でもなんかカッコいいな)

どんな子なんだろう。 気になった。

瞬

自分のクラスに向かう。擦れ違う人は知らない子ばかり。少し緊張する。

教室には既にクラスメイトが結構集まっていた。

やっぱりみんなどこかよそよそしさを漂わせ、隣の子に出身中を聞いたりだとか、何で通ってるか聞いたり、メアド交換したり…とそんな感じだ。

私の席は廊下側の後ろの方だった。とりあえず座ると周りの子が数人話かけてくる。

「よろしく」

「これからよろしくね〜どこ中？」

そのままたわいのない話をしメアド交換。

わりと私は人付き合いが上手いほうだ。相手が男の人だとまた変わってくるけど。

（なかなか良い高校入ったなあ）

ちなみに結構優秀な人がくる高校だし。頑張ったかいがあった。

新しい友達と話終えた後、ちょっと暇になってしまった。

（窓からの景色でも見ようかな）

窓際に近づいていくと…私のような考えをもったのだろうか、同じく外を眺めているショートヘアの男の、子…？

（や。まさかあ）

大丈夫。ちゃんとスカート履いてる。

なんか気になって、彼女に近よりたくなった私。私から近寄るのは珍しい。大抵は近寄られる方な私が。

「ね…」

ねえ。と話かけるつもりだった。

が。

ボスッという音とともに前のめりに。誰かの鞆につまづいたらしい。

「ひゃ」

音に気づいたショートヘアの彼女は振り返ってすぐさま私を支えてくれた。

あやうく入学早々怪我するところだった。それも滑って転ぶっていう。

「大丈夫？」

「う、うん。ありがとう」

ああ、とっても恥ずかしい。

私は彼女を見上げた。

見上げたというのは、なんというか…

（この子、でかい！）

170はあるんでは。私は152センチ。小さいでしょう。

それもこの子、すごい端正な顔立ち。ショートヘアと長身いうこともあって、美人なんだけど、どこかボーイッシュで美少年って感じ。

「なんかついてる？」

「えっ、うつん？」

ついみとれていた私。

「あの…女の子…ですよね」

冗談で言うのも失礼だったか。彼女は怪訝な顔もせず苦笑して言った。

「ここ、女子高」

「ですよね」

頭が馬鹿になってるのだろうか私は。

だって…だってあまりにもかっこいいから。

「でもよく男子と間違われるんだ、うち。名前も男っぽいし」
「名前は？」

「佐渡瞬」

さわたり、しゅん。

さっき気になった名前だ。かっこいいなって思った名前。

「私は望月歩花。えっと、瞬ちゃん…？」

「ちゃんづけしなくていいよ。瞬ちゃんなんて柄じゃないし」

「じゃあ、瞬…？」

「うん、よろしく。歩花」

二人で外を眺める。

綺麗な眺めだ。空が青い。

「君、可愛いよね」

横の瞬から声をかけられる。

「昇降口で後ろから見てた。一生懸命クラス分けの紙を見てる姿」

そ、そんなに私の行動は一生懸命だったのだろうか。

その前に、瞬が私を見ていたというのが気恥ずかしい。

「可愛い」

珍しい言葉でもなんでもない、友達同士でしょっちゅう投げかけ合う言葉。だけど、瞬に言われたのが嬉しかった。

なんでドキドキしてるんだろう。私。

入学式

入学式。

なんか…ずっとぼうつとしてた。

担任の先生は特に変わったところはない中年のおじさん先生。うーん確か国語科だっけ。忘れた。

髪の毛の薄くなった小さい校長先生。その話もよく覚えていない。

なんでこんなにも入学式に集中してなかったのかというのは、…率直に言えば瞬のせいだ。

（どうしたのかな…私）

どんなにイケメンの子だとしても相手は女の子だ。

どうした。私。

さっきから瞬のことが頭から離れない。

なんで…。

頭の中に「恋」という言葉がちらついた。

あっという間に入学式が終わると生徒達が自分の教室に戻っていく。

私もなんともいえないふわふわとした気持ちで教室に向かった。

「歩花！」

ポンツと急に肩に手を乗せられ、私は必要以上の驚きの声を上げてしまった。

「ふえっ！！??」

周りを歩いていた子達が一斉にこちらを見る。かわいい〜とかいう声が聞こえた。

恥ずかしい！

「あ…ごめんね歩花。でも驚きすぎ」

瞬だ。頬が熱くなるのを感じた。

「…だつてえ…」

瞬は顔を俯かせる私を見てふつと笑う。

「あゝもうホントに可愛いな歩花は」

頭をわしゃわしゃ撫でられた。

動機が激しくなる私。教室まで無事辿りつけるのかな…。

「もう…恥ずかしいよ子供みたいでしょ私…」

「ん？若くみられるんならいいじゃん？」

そっという意味じゃないよ、瞬…。

始まる

ふう。

どうにか心を落ちつかせて教室についた。

「じゃ、また後で」
「うん」

瞬は自分の席に戻っていく。結構私と離れてる。名前に当たり前か。

私も自分の席に戻ると、さっきメアド交換した子達がやってきた。

「ねえ、佐渡瞬ちゃんと同じ中学校だったの？」
「めっちゃ仲良くない？」

「…え、全然違うよ」

「そうなの？」
「あの子かっこいい！イケメンって感じ」

やっぱ誰から見てもそうなんだ。

「ちょっとアンタ周りに男子いないからって手だすんじゃないよ？」

「何言ってるの私は男狙いですう彼氏作るんですう」
「ちよつとごめんねこの子男に飢えてるから気にしないであげてね」

「う、うん」

（彼氏、か…）

先生がガラツと前の扉を開けて入ってきた。

今まで喋っていた生徒達が一気に静かになる。

「えー、ではね、簡単にこれからのこととかを話ましようかね。したら自己紹介なんかをね、やりましようかね」

先生の話が始まる。

いきなり受験の話をされてうんざりする。

自己紹介が始まる。

自然と瞬の自己紹介に耳を傾ける。

自分は当たり障りのない自己紹介をする。

始まる。

私達の高校生活が始まる。

登校

眠い目を擦りながらの翌日の登校。

私はバスも自転車も使わない。徒歩だ。だから目をしょぼしょぼさせながら歩いてるとよく歩行者にぶつかりそうになる。ホントに眠いんだもの。

周りを自転車登校の生徒や足早な生徒が通り過ぎていく。

（私も高校生なんだなあ）

実感。

少し背伸びしたような、大人になったような、そんな気分に戻る。

「えー！？彼氏いたの？？なんで言ってくれないの裏切り者お」
「ええ言わなかった？？」

周りを歩く生徒の会話が聞こえた。

（彼氏ね…）

いたらいいよね。

私は男が最初から嫌だったわけじゃない。

中学のときはちゃんと思いを寄せる男の子はいたし、告白とかも何度がされたことがある。

でも、

ある出来事がきっかけで男が怖いと思うようになってしまった。

（思い出したくない。やめよ）

頭の中の余計な邪念を吹き払うように私は走った。

そして、転んだ。

またかよ！

もう、自分でツツコミをいれなくなるドジぶりだ。

（えー…何もないところで転ぶって…）

恥ずかしいを通り越して飽きれに近い気持ちを抱きながらスカートについた砂埃を払う。

周りを確認すると、

「大丈夫？」

「瞬！いつのまに」

見られたんだ…。ショック。

「ちょうど今チャリできて、歩花発見！って思った瞬間的に急に走り出して急にこけたんだよ」

笑いを堪えながら言う瞬。

「笑わないでよー」

「あーごめんごめん。可愛いからいいよ。でも昨日みたいに支えられなかったね。もちっと早かったらなあ」

また、可愛いとか言う。

二人で並んで学校へと歩みを進める。瞬は乗っていた自転車を降りて。

隣にスラッとして歩いてる瞬はやっぱりかっこいいと思った。自然と見つめてしまう。

「ん？どした歩花」

「ううん」

こんな彼氏がいれば。

……
彼氏？

放課後

…気がつけば瞬のを見ていた。授業中も、ちょっと先生の話に飽きると自然と瞬の後ろ姿を見てしまう。

欠伸をしてたり、頬杖をついていたり、窓の外を見つめていたり。

（私、気持ちわるい女じゃん）

クラスメイトの友達を見ては少し恥ずかしく思いながらもドキドキする。

それがまだ異性だったら分かる。

相手は、女の子。

（なんなの…これじゃまるで）

恋みたいじゃない。

先生が部活動体験期間について何か言っていた気がする。知らない。私には部活をする気がないし。

あつという間に一日は過ぎた。こんなふうに三年間もあつという間なんだろうな。

放課後、他の皆がそれぞれ自分にあつた部活を探しに出ていく。

部活に入らないつもり生徒は教室にいるか、それとも帰るかだ。周りの子に部活体験に誘われたけど断ってしまった。

今日は教室には私以外誰もいない。まさか私だけではないよね。

放課後の、閑散とした教室。外はまだ明るいほうだ。そこに私は突っ立っていた。

（なんか、私傍から見たら悲しい人みたいじゃん…）
帰るか…。

そのとき、

教室に入ってきた人影。

瞬だった。

「お、歩花じゃん。どうしたの、誰もいない教室で。傍から見たら悲しい人だよ」

やっぱりそう思われるのね。

「歩花、もう帰るの？」

「うんまあ、部活入んないし」

瞬はタツと近づいてきた。「ちょっとお喋りしようよ」「お喋り?」

瞬はにっと笑う。

「えっ、瞬は部活いいの?」「ウチはもう決まってるんだよね、まだ明日もあるし」

それに、と瞬は付け足した。

「歩花と話したい」

「…」

胸が熱くなるのを感じた。「用事ある?」

「いや、…ない、よ」

ドキドキがとまらない。

これ、悟られたら気持ち悪いって思われるかな。

瞬は私の前の席に座った。私もカタン、と小さい音をたてて自分の席に座った。

告白

今気づいた。

この状況…私と瞬、二人つきり。

別に意識するものじゃないのは分かる。だけど、なんか気恥ずかしくてならなかった。机の下で手をキュツと握りしめる。

自分がこんなに緊張してる意味が分からない。

「…」

なにか喋らなきゃ、と思う。ちょっとした沈黙に耐えられなかった。

「あの、」

「歩花」

喋るタイミングが被る。

「あ…」

瞬は笑いながら「どーぞ」と私に促した。

いや…どうぞと言われても…。どうしよう。どうしよう。

「えと…」

焦った私の口から飛び出したのはどうでもいい謝罪の言葉だった。

「ごめん、瞬！あの、私…授業中とかいろいろ、ずっと後ろ姿ガン

見してて…！ホント意味分かんないんだけど、…あの、違うの！なんか瞬に会った時からすごい…めっちゃ背高くて、なんか…かっこいくて…その」

一気にまくし立てて最後の方の言葉が小さくなった。自分で何を言ってるのか分からなかった。

瞬はポカンと口を空けていて、ちよつとびっくりしたような感じだった。私が俯いたとたん吹き出した。
「なんだよ歩花ー、何言うかと思えば」

俯いたまま私はしまったなあと反省。

（ずっと見てましたごめんなさいって私どんな子だよ…）

「でも嬉しいな」

顔をおそろおそろあげた。

「…多分ね、うちが歩花より後ろの席だったら同じことしてたよ」

「え…？」

「歩花をじつと見てたってこと」

瞬の爽やかな笑顔に夕日の色がかかる。そろそろ暗くなるだろう。

「うちら両想いかもね」

え…？

胸が高鳴る。なんだ。これ。

「うち、歩花に一目惚れしたんだ」

私が返答できないうちに瞬は私を見つめて言った。

「付き合わない？歩花。歩花がうちの彼女」

付き合…

「え…っえ…、え」

上手く言葉が出ない。

付き合うつて、つまり瞬が彼氏で私が彼女つてそういう…

「気持ち悪い？女同士つて」「え、そ…」

「上辺だけでいいんだよ、ごっこ遊びで。女子高だし」

言ってしまえば嫌なんて気持ちは私にはなかった。

こんなの普通じゃない。分かってる、そんなこと。

でも、私は嬉しかった。とても。とても。

今はつきりした。

（私は瞬に一目惚れしたんだ）

「付き合わない？歩花」

さっきの言葉を繰り返す瞬。

私は顔を真っ赤にしながらくっくり頷いた。

翌日

その日はよく眠れなかった。

瞬のことで頭がいっぱいでいっぱい。

（付き合う？）

なんか、その場のノリでOKしてしまったけど、かなり可笑しい気がした。

（男子と付き合った時がない私が女の子と付き合っって…）

まあ、男子とはこれから先付き合いたいとは思わないけど。

翌日の朝。

瞬とまた会っくんじゃないかとそわそわする。どんな顔をすれば良いんだろう。

結局今日の朝は瞬と会うことはなくて、残念な気持ちとホッとした気持ちで渦をまいていた。

教室に入ろうとした時に誰かにぶつかる。

「ごめっ」

「歩花、おはよ」

瞬だった。予想以上に顔が近くなってしまいびっくりする。

「!…お、おはよ!」

バツと後ずさりすると瞬は笑った。

「可愛い、真っ赤」

「う…からかわないで」

「ごめんごめん」

そのまま教室から出ていく瞬の後ろ姿を軽く睨みつける。

（でも、やっぱカッコいいよ、瞬）

「おはよー瞬ちゃん」

「おはよー」

クラスメイトと挨拶を交わすのが聞こえた。

（瞬ちゃんだって）

なんか違和感。顔がにやける。

「おはよう歩花ちゃん!」

そのクラスメイトが教室に向かって走ってくる。

「おはよう!」

私と瞬の関係を知っている人は、まだいないんだ。

部活体験

「部活体験いかない？」

休み時間、瞬に誘われた。

有無を言わせる前に瞬は自分の席に戻ってしまう。

「じゃ、考えといて！」

（考えといて…って）

私、部活入るつもりないって言ったのになあ。

放課後になった今、掃除を終わらせた私は暇をもて余していた。瞬とは別の掃除区域。

帰っても良いんだろうけど…。

（瞬に誘われたし…）

昨日も別なクラスメイトに誘われたのに断ってしまった私。ちょっと罪悪感的なものを感じる。

（か、彼氏に誘われたんだし…？）

自分で思っただけで恥ずかしくなった。意味分かんない。

「歩花！」

瞬が走ってきた。

「瞬！掃除終わったの？」

「うん、たった今……ていうか、待っててくれたんだ」

私が訝しげな顔を見ると、瞬は慌てて言う。

「や、歩花が帰っちゃうとか思ってたんじゃない。…あの、昨日からうち、付き合おうとか一緒に行こうとかしつこかったんじゃないかな…なんて、ほんと…歩花にしつこいって思われてんじゃない…みたいな…」

すらりと背の高い瞬の整った顔を覗くと、瞳が揺らいでいるのが分かった。

「…」

瞬もいろいろと考えてたんだ。私が昨日の夜瞬のことで頭をいっぱいだったように、瞬も私のことでいっぱいだったんだ。自分の言ったことが良かったのだろうか悩んでたんじゃないだろうか。多分。

そう考えるとなんだか嬉しくて。瞬がとても愛しく感じた。

「瞬」

瞬の手を自分の手のひらで包む。

「あゆ…」

瞬が口を開くと同時に私は瞬の手を握って走りだした。

「ちょ、歩花！」

「瞬らしくない顔しないでよ！」

「らしくないって」

「私、昨日も今日も嬉しかったの！全然しつこいとか思っていないの！それどころかもっと誘って欲しいですー！」

走りながら言う。私達のやりとりは特別目立つわけでもなく、普通の女子高の放課後の日常に普通に同化してるだろう。

私達は恋人なんだし、という言葉はあえてしまっておいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9971x/>

しゅんあゆらいふ。

2011年11月30日21時51分発行